

## 陶淵明の死生觀について

大地 武雄

東晉の詩人陶淵明の詩文に、「死」を扱うものが多い、本論では、その詩文に現れた死生觀について探ってみよう。

まず、身内の者の死の體驗、死への恐れ、死からの逃避、死の受容と諦觀、死の客觀化と臨終詩等、死を受けとめつつも、動搖し諦觀し達觀し、死に直面する迄の詩文を辿りながら、陶淵明の死生觀及びその思想的背景について考察する。

### 一 身内の者の死の體驗

陶淵明が此の世に生を受けて以來、身内の者の死に遭遇することが多く、作品中に次のような例が見られる。

最初の死の體驗は、八歳の頃の實父の死である。「祭從弟敬遠文」に、

父は則ち同生 父は則ち同生  
母は則ち從母 母は則ち從母  
相及韶皀 韶皀に相及んで  
竝羅偏咎 竝びに偏咎に羅る  
とある。韶皀は、『韓詩外傳』に  
毀齒也、男八月生齒、八歲而皀。女七月生齒、七歲而皀。从齒

陶淵明の死生觀について

(齒を毀するや、男八月にして齒を生じ、八歲にして皀す。女七月にして齒を生じ、七歲にして皀す。齒に从ふ)。  
とあるところから、八歳の意である。〈偏咎〉は、片親を失うことであり、後述するように實母の死が、後年であるところから、ここでは父の死をいうことが明らかである。

次いで、十二歳の頃、妹の母(庶母)の死に遇う、「祭程氏妹文」に、

慈妣早世 慈妣 早世し  
時尙孺嬰 時に尙ほ孺嬰  
我年二六 我は年二六  
爾纔九齡 爾 纔かに九齡  
とある。〈慈妣〉は、妹の生母のことで、〈我年二六〉は、十二歳のことである。

三十歳の時、最初の妻と死別している。「怨詩楚調示龐主簿鄧治中」詩に、

弱冠逢世阻 弱冠にして世阻に逢ひ  
始室喪其偏 始室にして其の偏を喪ふ  
とある。〈始室〉は、『禮記』内則篇に、

三十而有室 始理男事（三十にして室有り始めて男事を理む）とあり、〈始室〉は、三十歳のことで、〈喪其偏〉は、三十歳で伴侶（妻）を失った意である。

三十七歳で實母孟夫人が亡くなっている。「祭程氏妹文」に

昔在江陵 昔 江陵に在りしとき

重權天罰 重ねて天罰に罹る

と詠じている。〈昔在江陵〉は、「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」の詩があることから辛丑隆安五（四〇二）年、陶淵明三十七歳の時である。〈重〉とあるのは、十二歳の時の庶母の死に加えての意である。

次は、四十一歳の時、彭澤の縣令辭任に繋がる義妹（程氏妹）の死である。

そして、四十七歳の時、從弟敬遠の死に遇う。「祭從弟敬遠文」に、

歲在辛亥 歲は辛亥に在り

月惟仲秋 月は惟れ仲秋

旬有九日 旬有九日

從弟敬遠 從弟敬遠

卜辰云空 辰を下して云に空す

永寧后土 永く后土に寧んぜよ

とあるところから、辛亥は義熙七（四一二年）、陶淵明四十七歳の時である。

さらに、年代は不明であるが、「悲從弟仲德」という詩のあるところから、從弟仲德の死にも遭遇している。

このように、幼少の頃から、父、庶母、最初の妻、實母、義妹、從弟等、身内の親しい人々の死に直面し、その度毎に死への不安や恐れを次第に深めて行ったものと思われる。さらに、加えて、明日をも知

れぬ不安定な東晉の混亂した社會的背景も、陶淵明に早い頃から死を意識し、深く思考させる要因となったことであろう。

陶淵明の詩文を詳細に見て行くと、死への不安や恐れなどに言及しているものが三十四篇ほどある。この数は、實に陶淵明の詩文（三四篇）のおよそ四分の一の多きを占める。生死の問題は、まさに、陶淵明文學の根幹を成す重要なテーマといわざるを得まい。陶淵明を「死を詠う詩人」とさえ呼んで差し支えないほどであろう。

魯迅も「魏晉の風度および文章と藥および酒との關係」と題する講演の中で、

陶潛は俗世と無縁になることが出来なかつた。しかも、朝政に未練を残してさえた。そして、「死」を忘れ去ることもできなかつた。それは、彼の詩文にしばしばとりあげられている。

と指摘している。（、点筆者附す。以下同じ）

## 二 死と死への恐れ

まず、陶淵明の作品中より、死をどうとらえているか見てみよう。

「形影神并序」に

貴賤賢愚、莫不營營以惜生（貴賤賢愚、營營として以て生を惜しまざるは莫し）。

と記す。此の世に生を享受した者は、貴賤賢愚を問はず誰でも、生を惜しんで不老長生を願うのである。しかし、同じ詩の「神釋」には、次のように詠う。

彭祖愛永年 彭祖は永年を愛して

欲留不得住 留まらんと欲するも住まざるを得ず

老少同一死 老少共に一たび死し

賢愚無復數 賢愚復た數ふる無し

長生を願ったとしても、死だけは賢愚を問わず、誰彼の區別なく平等に、しかも確實にやってくる。これは、『列子』楊朱篇に、

生則有賢愚貴賤、是所異也。死則有臭腐消滅、是所同也。(生きては則ち賢愚貴賤有り、是れ異にする所なり。死しては則ち臭腐消滅有り、是れ同じくする所なり)。

とあり、漢代の樂府「蒿里曲」にも、

蒿里誰家地、聚斂魂魄無賢愚、鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕(蒿里は誰が家の地ぞ、魂魄を聚斂して賢愚無し、鬼伯一に何ぞ相ひ催促する、人命は少しも踟躕するを得ず)。

とあるに同意である。

しかも、貴賤賢愚と雖も、一度死去してしまつたなら、再び此の世に生還することはない。「形贈影」に、

適見在世中 適たま世の中に在りと見るに

奄去靡歸期 奄ち去つて歸期靡し

という。此の世にいた人が忽焉として死去してしまつたならば、二度と此の世に姿を現すことはない。「悲從弟仲德」にも、

鬢然乘化去 鬢然として化に乗じて去り

終天不復形 終天 復た形あらざる

とある。この〈乘化〉は、表10にあるように、「還舊居」詩の〈常恐大化盡、氣力不及衰〉の〈大化〉や「飲酒」其十一の〈臨化消其實〉の〈臨化〉と同様に「死」を意味する。「祭程氏妹文」にも、

如何一往 如何せん 一たび往きて

終天不返 終天 返らざるを

と嘆き、亡き義妹を思っている。「祭從弟敬遠文」にも、

陶淵明の死生觀について

長歸蒿里 長えに蒿里に歸り

逸無還期 逸として還る期無し

とある。生者が一度死去したならば、再び生還出来ない事實は、こうした陶淵明の身近な者との死別の體驗から歸納された實感であり、〈不復形〉〈不返〉〈無還期〉等に、繰り返し述べられている。これらは既に、漢代に歌われた王侯貴族を葬送する歌「薤露歌」に、

薤上露、何易晞、露晞明朝更復落。人一去何時歸。(薤上の露、

何ぞ晞き易き、露は晞けども明朝更に復落つ。人は一たび去れば何れの時にか歸らん)。

とあるのを踏まえている。

そうした人の存在(命)の儂さは、歸田して山澤の遊びに出かけ、隣村の昔馴染みを尋ねた時の詩、「歸園田居」其四にも、次のように詠う、

薪者向我言 薪者 我に向ひて言ふ

死沒無復餘 死没して復た餘す無しと

一世異朝市 一世にして朝市を異にす

此語真不虛 此の語眞に虚ならず

人生似幻化 人生幻化に似て

終當歸空無 終に當に空無に歸すべし

嘗ての村人の生活の迹が残っているけれども、そこにいた人達は皆死没してしまい、その存在は〈幻化〉のようで、「無」に歸してしまふ。

以上のように、人は誰れも長生を願いつつも、死は等しく確實に訪れる。そして、一度死去すれば、此の世に再び生還することはない。

この事實は、身内の者の死によって實證されている。そうであれば、陶淵明の死をみつめる態度が、次第に深刻の度を加えていくのは當然

のことである。

「巳酉歲九月九日」に、

萬化相尋異 萬化 相尋いで異なり

人生豈不勞 人生豈に勞せざらんや

從古皆有沒 古えより皆沒する有り

念之中心焦 之を念へば中心焦る

とある。九月九日は、『西京雜記』にもあるように、重陽の節句で長壽久生を願う日であるがゆえに、かえって強く死が意識され、忍び寄る死を思うとどうしてよいのか術もなく、ただ心の中が焼け焦れる程の苛立ちを感じる。「雜詩」其三にも、

日月還復周 日月 還り復た周るも

我去再不陽 我去つて再び陽あらず

眷眷往昔時 眷眷たる往昔の時

憶此斷人腸 此を憶へば人の腸を斷たしむ

と、一度此の世を死去したならば、再び此の世に生還することはない。〈憶此〉の此は明らかに、そのことを指し、死を思うと腸を斷つ程であると苦惱し、狂おしさを訴えている。

さらに、晩年の作と思われる詩文には、病と老による衰えが詠じられている。「還舊居」に、

常恐大化盡 常に恐る 大化盡き

氣力不及衰 氣力 衰に及ばざらんことを

壽命が盡きて〈衰〉迄生きられないのではないかと恐れている。〈衰〉は、『禮記』内則及び玉制篇に、〈五十始衰〉とあるところから、五十歳の意で、陶淵明はそれ迄生きられないのではないかと恐れている。「雜詩」其五にも、

氣力漸衰損 氣力 漸く衰損し

轉覺日不如 轉た覺ゆ 日に如かざるを

とある。此の頃、既に氣力體力ともに衰えが目立ち始めていたと思われる。同じ「雜詩」其七にも、

弱質與運續 弱質 運とともに續れ

玄髮早已白 玄髮 早已に白し

と。その病弱な體の衰えとともに、髪もすっかり白くなってしまったことを訴えている。

さらに、五十一・二歳の頃の作、「示周續之祖企謝景夷三郎」詩に、

負病積簷下 病を負ふ 積簷の下

終日無一欣 終日 一の欣びも無し

藥石有時聞 藥石 時有りて聞なり

念我意中人 我が意中の人を思ふ

と、病を得て藥石に頼っていることを詠う。それを物語るように、「與子儼等疏」に、

吾年過五十……病患以來、漸就衰損、親舊不遺、每以藥石見救、自恐大分將有限也（吾年五十を過ぐ……病患ひて以來、漸く衰損に就く。親舊遺れず、毎に藥石を以て救われしも、自ら恐る大分將に限り有らんとするを）。

とも言う。病を得て藥石によって、辛じて命永えているものの、いつ大分（死）がやってくるかと怯えているのである。五十八歳の頃の作と思われる「答龐參軍并序」にも、

吾抱疾多年、不復爲文、本既不豐、復老病繼之（吾疾を抱くこと多年、復た文を爲らず、本既に豊かならず、復た老病之に繼ぐ）。長年、病の床に臥して詩文も作らずにいた上に、老の病が加わりす

かり衰弱してしまつたことを訴えている。

陶淵明は、五十歳を過ぎた頃より病氣がちになり、氣力體力も次第に衰弱して、死は身近かな存在として強く意識されていた。

### 三 仙界志向とその否定

通り來る死は、絶対に避けられないものであれば、死への恐れをまぎらす方法として、まず第一に酒がある。「已酉歲九月九日」に、

從古皆有沒

古えより皆没する有り

念之中心焦

之を念えば中心焦る

何以稱我情

何を以て我が情を稱へん

濁酒且自陶

濁酒且く自ら陶しまん

とあるように、胸底が燒かれるほどの死の恐れをしばし濁酒で慰める。「連雨獨飲」にも、

運生會歸盡

運生 會す盡くるに歸す

終古謂之然

終古 之を然りと謂ふ

世間有松喬

世間に松喬有り

於今定何聞

今に於いて定めて何をか聞く

故老贈余酒

故老余に酒を贈り

乃言飲得仙

乃ち言ふ 飲まば仙を得んと

試酌百情遠

試みに酌めば 百情遠く

重觴忽忘天

觴を重ねれば忽ち天を忘る

と。人が死ぬことは、古より萬民の認めるところであり、松喬（仙人）にもなれないとするならば、その死の恐れから逃れるために、故老のくれた酒を飲んで、諸々の憂情から解放され天さえも忘れたいと。飲酒による陶酔によって、死の恐怖から一時的にはあるが、逃

避するのである。

一方、仙界に救いを求めることも詠う。陶淵明には、中國古代の地理書といわれ、中國各地の山川や奇怪な動植物、神話傳説等について記された『山海經』を讀んで、十三首に纏めた「讀山海經」詩がある。こうした詩の存在自體、仙界への關心の強さを表わしている。そして、十三首中、直接仙界や求仙を詠じた詩が七首程ある。其五

我欲因此鳥 我は欲す 此の鳥に因つて  
具向王母言 具に王母に向ひて言はんことを  
在世無所須 世に在りては須ふる所無し  
惟酒與長年 惟だ酒と長年のみ

と、崑崙山の西王母に、長生と好きな酒が十分飲めることを願っている。其八にも、人には死がやってくるのは必定であるから、

赤泉給我飲 赤泉 我が飲に給し

員丘足我糧 員丘 我が糧を足さば

方與三辰游 方に三辰と遊びて

壽考豈渠央 壽考 豈に渠かに央きんや

赤泉の水を飲み、員丘山の木の實を糧とすれば、三辰（日・月・星）

とともに長命は得られると詠う。

不老不死の仙人（西王母）の住んでいる仙界は、人間にとつても老不死を約束してくれる世界であり、死の恐れから逃れるために求めて止まない世界でもある。だから、陶淵明は、『山海經』を讀みつつ一時的にでも、奇想天外な世界に遊び、死の恐怖から逃避したのである。このように死を忘れることの出来る世界があることは、陶淵明にとって大きな救いであつた。

しかし、仙界を強く望んだとしても、現實にはそうした願いは叶えられない。なぜなら、天に舞い上がることも出来ず、登仙の術も身につけていないからである。「形贈影」に、

我無騰化術 我に騰化の術なければ

必爾不復疑 必ず爾らんこと復た疑はず

という。「影答形」にも、

存生不可言 生を存するは言ふ可からず

衛生每苦拙 生を衛るに毎に拙なるに苦しむ

誠願游崑華 誠に崑華に游ばんと願へども

邈然兹道絶 邈然として茲の道絶へたり

とあり、己の生命身體を存つことさえ出来ないのであれば、仙界に長

壽を願ったとしても、仙界への道は邈然として當てにならないものである。「歸去來兮辭并序」にも

富貴非吾願 富貴は吾願いに非ず

帝鄉不可期 帝郷は期す可からず

帝郷（神仙界）は、期待出来ない<sup>(望)</sup>と否定している。

死を恐れて〈中心焦〉ほどの苦惱をし、一日でも長命でありたいと

不老長生を願ひ、それを實現してくれるという仙界を求めても、仙界

は當てに出来るものでなく、自ら否定せざるを得なかった。

#### 四 死の受容と諦観

人には等しく死が訪れ、不老不死の仙界も當てにならないのであれば、死があるが儘に受け入れるほかないのである。「歸去來兮辭并序」に、

聊乘化以歸盡、樂夫天命復奚疑（聊か化に乗じて以て盡くるに歸

し、夫の天命を樂しみて復た奚ぞ疑はん）。とあるように、自然の變化に任せて死をあるが儘に受容し、天命を樂しんで何も疑わない。

さらに、「五月且作和戴主簿」にも、

人理固有終 人の理 固より終りあり

居常待其盡 常に居て其の盡くるを待つ

人には固より終焉（死）があるとするならば、命運盡きるのを靜かに待とうと詠う。

また、「歳暮和張常侍」にも、

民生鮮長在 民生 長く在ること鮮し

矧伊愁苦纏 矧んや伊れ愁苦の纏るをや

屢闕清酤至 屢しば清酤の至るを闕き

無以樂當年 以て當年を樂しましむる無し

窮通靡攸慮 窮通 慮る攸靡く

顛覆由化遷 顛覆 化に由りて遷る

人はいつ迄も生存し続けることは不可能である。〈顛覆由化遷〉ように、生命が衰亡して行つて、死へと化遷するのであれば、それもまた

仕方あるまいと諦観している。

そして、「挽歌」其一の

有生必有死 生有れば必ず死有り

早終非命促 早く終ふるも命の促まれるに非ず

命ある者には必ず死が訪れるのであれば、早晚死ぬのも仕方のないことである。これを受けて、其三では、

死去何所道 死し去って何の道ぞ所ぞ

託體同山阿 體を託して山阿に同じからん

死して何の道に託して山阿に同じからん

もう何も言うことはない。我が遺體をあゝの山阿に委ねようと達観して  
いるのである。

## 五 死の客観化と臨終詩

死を諦観し、達観した陶淵明は、自らの死を客観化している。まず  
最初に、周家の墓へ行樂に出かけた時の詩に觸れておこう。「諸人共  
游周家墓柏下」に、

感彼柏下人 彼の柏下の人に感じては

安得不爲歡 安くんぞ歡を爲さざるを得んや

清歌散新聲 清歌に新聲を散じ

綠酒開芳顏 綠酒に芳顏を開く

未知明日事 未だ知らず 明日の事

余襟良以殫 余が襟は良に以て殫きたり

と詠ずる。墓で遊ぶということ自體、死者と關わる意識がみられる。  
死者へ思いを馳せ、やがて、自分も墓の中の人となることを想起し、  
有限なる生の時間を楽しく過ごそうとする。單なる行樂の詩ではな  
く、死者を意識しながら、生の喜びを歌う意圖が含まれている。

さらに、發展させて、死と直面している自己(陶淵明)を客観化し  
て詠じた詩文がある。一つは「挽歌」であり、他は「自祭文」であ  
る。それだけ、陶淵明は死への關心が強かったといえよう。

まず「挽歌」の源流を尋ねてみると、『春秋左氏傳』の哀公十一年  
に、

公孫夏命其徒歌虞殯(公孫夏其の徒に命じて虞殯を歌はしめ)と  
あり、杜預が、

虞殯送葬歌曲示必死也(虞殯は送葬の歌曲にして必死を示すな

陶淵明の死生觀について

り)。

と註を加えている。『詩經』には、黃鳥、一子乘舟、葛生などに死者  
を悼む歌があり、やがて、漢代の薤露、蒿里へと發展し、魏晉六朝期  
には、繆襲、傅玄、陸機等によって盛んに作られた。しかも、注目す  
べきことは、劉義慶の『世說新語』任誕篇に、

張麟酒後挽歌甚悽苦(張麟は酒後に挽歌して甚だ悽苦なり)。

とあるように、死者を哀しみ、死者への思いを寄せて、宴席などでも  
歌われるようになったのである。

さて、陶淵明の「挽歌」は、直接には陸機の挽歌の影響を受けて、  
其一是納棺、其二是葬送、其三是埋葬という三首構成になっている。

しかも、各首の末尾句と次句の冒頭を結びつけ、連關させている點  
等、既に一海知義氏が、「文選挽歌詩考」で指摘している通りである。

「挽歌」其一では、生ある者には必ず死が訪れる(有生必有死)と  
いう死の必定を述べ、死の文學であることを宣言しているかのようであ  
る。しかも、讀み進むうちに、陶淵明自ら(我)の遺體の納棺であ  
ることを詠ずる。

嬌兒索父啼 嬌兒は父を索めて啼き

良友撫我哭 良友は我を撫して哭す

この點で、それ迄の挽歌と違い、自挽歌であることを明確にしてい  
る。そして、生前好きな酒が十分飲めなかったことへの不満を述懐す  
る。

但恨在世時 但だ恨むらくは 在世の時

飲酒不得足 酒を飲むこと 足るを得ざりしを

と。それを受けて、其二では、生前飲めなかった酒が、皮肉にも眼前  
の觴になみなみと注がれていることを恨めしく思うのである。まさに

戲謔化であろう。

在昔無酒飲

在昔 酒の飲むべく無く

今但湛空觴

今は但だ空しく觴に湛ふ

春膠生浮蟻

春膠 浮蟻を生ずるも

何時更能管

何れの時か 更に能く管めん

と。さらに、其三での

親戚或餘悲

親戚 或いは悲しみを餘すも

他人亦已歌

他人 亦已に歌ふ

も戲謔化である。親戚は悲しみにくれているのに、他人は既に鼻歌交りである光景は、忘れられていく死者の存在と死者とは他人の關係にある者の抱く、傍觀者の利己主義が露骨に現れている。それは、生前陶淵明のよく眼にした葬送の光景であり、恐らく、自分の時もそうであらうとの皮肉が込められている。

以上のように、眼前の事實を客觀的に描くだけで、陶淵明の意圖が十二分に讀者に傳わるように工夫されている。ここに、これ迄の挽歌にヒントを得つつも、自らの死に對峙し、死を客觀化し、戲謔化する獨創性があり、死を詠う詩人の面目躍如たるものがある。

次に、「自祭文」もまた、自らの死を客觀化しての祭文である。祭文はもと祝文が變化して人の死を悼む文となつたものであり、陶淵明には、「祭程氏妹文」「祭從弟敬遠文」の二つが既にある。あるいは、これらのものにヒントを得て、自己の死を悼むという「自祭文」なるものを創案したのであらうか。これ迄の記録に見られないところから、陶淵明の獨創であつたと言えよう。

「自祭文」は、

歲惟丁卯 歲は惟れ丁卯

律中無射 律は無射に中る

と、自らの生涯を閉じる年月を明示することから始まる。そして、

陶子將辭逆旅之館 陶子 將に逆旅の館を辭し

永歸於本宅 永えに本宅に歸らんとす

と。自分はこの世の假の宿を後に、あの世(本宅)に歸って行くのである。

生前自分は不運な時に生き、貧窮の生活をした。そうした中でも、畑仕事に精を出し、琴書を樂しみ、分相應の暮しをして満足であつた。名譽や名聲などを氣にかける世間の人とは異なり、隠棲して好きな酒を飲んで詩を賦してきた。そうした自分も親戚、友人に見守られて曠野に葬られ、

不封不樹 封らず 樹うえず

日月遂過 日月 遂に過ぐ

匪貴前譽 前譽を貴ぶに匪ずんば

孰後歌 孰か後歌を重んぜん

人生實難 人生 實に難し

死如之何 死は之を如何せん

嗚呼哀哉 嗚呼 哀しい哉

と、「自祭文」は終える。

一見達觀したかのように見える中にも、注目すべき點がある。それは、「自祭文」が結末に近づくに従つて、反語、疑問の形を多用し、自らに問いかけ、問い質すことである。

樂天委分 天を樂しみ分に委ね

以至百年 以て百年に至る

と詠じた後、



識運知命 運を識り命を知るも

疇能罔眷 疇か能く眷る罔からん

生ある者は必ず死ぬとわかっていても、一體誰が此の世に未練があつて振り返らぬ者がいようか。誰でも死を直前にし、死と向かい合った時、此の世を振り返らずにいられないのが偽らざる心境である。また、

従老得終 老従り終を得んに

奚所復戀 奚ぞ復た戀ふる所ぞ

と。この〈奚〉は、老から死へと移行するのだから、どうして此の世を戀い慕うことがあろうか、といいつつも此の世に未練を残しているがゆえの〈奚〉であろう。そして、

匪貴前譽 前譽を貴ぶに匪ずんば

孰重後歌 孰か後歌を重んぜん

と。生前の名譽など貴ばないのであるから、どうして死後、生前の譽れを讀える歌など氣にかけようか、と達觀しつつも〈後歌〉に拘っている心中が窺える。

死が刻一刻と近づいて、一旦諦觀したかのような言動があつたとしても、此の世への未練や拘りがあつて、廻り來る死を乗り越えられないのではいか。陶淵明のこうした躊躇や逡巡は、死を詠じた「自祭文」に顯著に見えるばかりではない。

既に、石川忠久氏が「歸去來兮辭并序」の中で、

全篇に用いられた疑問、反語の何と多いことか、試みに掲げてみよう。

田園將蕪胡不歸 奚惆悵而獨悲 復駕言兮焉求 寓形宇內復幾時  
曷不委心任去留 胡爲乎遑遑欲何之 樂夫天委復奚疑

こういう語のくり返しによって、何度も自分に問いかけ、自分を

陶淵明の死生觀について

納得させているのだ。

と、指摘しているのと軌を一にする。

陶淵明は、仕官の放棄―歸田という人生の重大事を決意する時、何度も自らに問いかけ、問い質している。これは、對社會的に致仕という形態の完了はみたものの、陶淵明の内面的處理が未完了であり、決断しかねている心の葛藤が、こうした疑問や反語に如實に明示されている。

「自祭文」では、時々刻々と死が近づいてくるという事實が認識されつつも、それへの陶淵明の内面的對應が未熟であるところから、〈疇〉〈奚〉〈孰〉などの疑問、反語表現が自然に多用され、心の葛藤による躊躇や逡巡を露呈する結果となっている。

臨終の自分に問いかけたものの、何等納得のいく答えの見つからなのまま、死は刻々と逼ってくる。〈人生實難〉は、そうした陶淵明の心の中を率直に表現した眞實の心の叫びであろう。次の〈死如之何〉は、死を目前にどうすることも出來ぬ苛立ちの表白である。鈴木修次氏も「密康 阮籍から陶淵明へ」の中で、

その最後にいたって、「人生實に難し、死はこれを如何にせん。ああ哀しいかな」と結んでいるのは、やはり達觀のみではかたづけられない生き身の心の奥の吐息を、ひそかに示すであろう。

と述べている。

## 六 死生觀の思想的背景

次に、こうした陶淵明の死生觀の思想的背景について考察してみよう。「歸去來兮辭并序」の中で、

感吾生之行休、已矣乎。寓形宇內復幾時、曷不委心任去留（吾が

生の行くゆく休するを感ず、已んぬるかな。形を宇内に寓する復幾時ぞ、曷んぞ心を委ねて去留に任ぜざるを」と。自分の壽命が時間の経過とともに、死に近づくのであれば、それも仕方ないこととして、この「吾生之行休」は、『莊子』刻意篇にあるところの、

其生若浮、其死若休（其の生は浮かぶが若く、其の死は休するが若し）。

とあるによる。生きている間は、水に浮かび漂うように、死しては休息するように、あるが儘にと、『莊子』の「一死一生」の死生觀によるものである。齊物論篇にも、

一受其成形 不亡以待盡（一たび其の成形を受ければ 亡はずして以て盡くるを待て）。

自然に生を受容し、生を失つては死を自然に待つ。生死に逆らわず、あるが儘に死につくのがよいとするのと同意である。この生死は、天道篇に、

其生也天行、其死也物化（其の生くるや天行、其の死するや物化）。

とあるが如く、天の運行に従つて生が附與され、物の變化に身を任せ死んで行く。こうした死生觀は、表10、12、13、14の例に見られるように、〈乗化〉〈遷化〉〈化遷〉〈臨化〉の句となつて詠じられてゐる。

そして、大宗師篇に、

孰能以無爲首、以生爲脊、以死爲尻。孰知死生存亡之一體者（孰か能く無を以て首と爲し、生を以て脊と爲し、死を以て尻と爲す。孰か死生存亡の一體なるを知る者ぞ）。

とある。死生（生前、現世、死後）を身體に喩えて、首は身體の最上部

にあるところから生前、脊は身體の中心ゆえ現世、尻は死後とする。生前、現世、死後を身體に見たてるならば、身體の各部でありながら、一體の線上で形を變えたものであり、「死生一體」ととらえる『莊子』の死生觀が窺える。

次に、陶淵明の「還舊居」詩に、

常恐大化盡 常に恐る 大化盡き

氣力不及衰 氣力 衰に及ばざるを

とある。この〈大化〉大きな變化（表7）は、『列子』天瑞篇の、

人自生至終 大化有四。嬰孩也。少壯也。老耄也。死亡也（人は生まれより終に至るまで 大化四有り。嬰孩なり。少壯なり。少壯なり。老耄なり。死亡なり）。

とある〈死亡〉を指してのことである。この死は、周穆王篇によれば、

造化之所始、陰陽之所變者 謂之生、謂之死。窮數達變 因形移易者、謂之化、謂之幻（造化の始まる所、陰陽の變ずる所の者、之を生と謂ひ、之を死と謂ふ。數を窮め變に達し 形に因つて移易する者、之を化と謂ひ 之を幻と謂ふ）。

とある陰陽二氣の變化によって、生となり死となる。しかも、生から死へと變化することを化といい、幻という。

さらに、死について、天瑞篇に、

其在死亡也 則之於息焉（其の死亡に在るや 則ち息に之く）。

とあり、死は専ら休息であるという。そして、その休息の場は、精神離形、各歸其真。故謂之鬼。鬼歸也。歸其真宅（精神形を離るれば、各々其の真に歸す。故に之を鬼と謂ふ。鬼は歸なり。其の真宅に歸するなり）。

というところの眞宅である。精神が肉體から遊離してしまふ(死ぬ)と精神も肉體も(眞宅)に歸着する。

この(眞宅)は、陶淵明の「自祭文」にいうところの(本宅)と同意であらう。「自祭文」に

陶子將辭逆旅之館 永歸于本宅。(陶子 將に逆旅の館を辭し 永えに本宅に歸らんとす)。

と、死に向かわんとする自己を詠じている。逆旅は、旅人を逆える旅舎である。此の世は、旅人を逆える假りの宿、やがて、永遠の安息の地である本宅へ歸らうとする。また、この(逆旅之館)は、『列子』仲尼篇に、

視生如死、視富如貧、視人如家、視吾如人。處吾之家、如逆旅之舍(生を視ること死の如く、富を視ること貧の如く、人を視ること家の如く、吾を視ること人の如し。吾の家に處ること、逆旅の舍の如し)。

とあるによる。此の世を假りの宿とし、生者を行人(か)ととらえ、日々旅をし、旅を住處とする。その旅人である生者が、やがて、死者となり此の世の旅舎を後にして、永遠に安住の地である本宅に歸り、休息しようとするのである。これは、天瑞篇に、

古者、謂死人爲歸人。夫言死人爲歸人、則生人爲行人矣。行而不歸。失家者也(古は、死人を謂ひて歸人と爲せり。夫れ死人を言ひて歸人と爲せば、則ち生人を行人と爲す、行いて歸るを知らず。家を失ふ者なり)。

というところに等しい。このように、人は死して逆旅の館を辭して、眞宅に歸るのである。「韓詩外傳」にも、

人死曰鬼、鬼者歸也。精氣歸於天、肉歸於土、血歸於水、脈歸於

澤、聲歸於雷(人の死するを鬼と曰ひ、鬼とは歸るなり。精氣は天に歸り、肉は土に歸り、血は水に歸り。脈は澤に歸り、聲は雷に歸る)。

とある、鬼については、『説文』にも、

鬼人所歸爲鬼(鬼は人の歸する所にて鬼と爲す)。

とあるところからも、人は死して(鬼)となり、(眞宅)に歸るのである。

以上のように、生者を行人、此の世を逆旅の舎ととらえ、生者が死者となつて眞宅に歸することは、恰も往くのと反るのとの關係である。こうした天瑞篇に見える生と死は、自然に任せて往き反ることと同意であり、

死之與生、一往一反(死と生とは、一往一反なり)。

という「一往一反」の死生觀によるものである。こうした天瑞篇を中心とした『列子』の死生觀は、陶淵明の臨終詩ともいえる「挽歌」や「自祭文」に見られる死生觀の形成に強い影響を與えていることは明白である。

次に、陶淵明の「榮木」に、

晨耀其華 晨に其の華を耀かすも

夕已喪之 夕べには已にこれを喪ふ

人生若寄 人生は寄の若く

顧領有時 顧領すること時有り

とある。これは、『淮南子』精神訓篇の、

生寄也 死歸也(生は寄するなり 死は歸るなり)。

とあるによるであらう。生は一時的寄宿であつて、死こそ永遠の歸宅である。しかも、その死について、

其生也天行、其死也物化（其の生や天行、其の死や物化）の如く、物の變化によって、生から死へと移り行くと述べている。

そして、同じ精神訓篇に、

齊死生則志不懾矣。同變化則明不眩矣（死生を齊しとすれば則ち志懾れず。變化を同じとすれば則ち明眩ます）。

死生を一如とすれば、懾れることもなく明知は眩むことがない。一例をあげれば、鄭の神巫が壺子林の相を見て、死相と讀みとつたもの、後、生機の發動變化があり、それを稱して、

壺子之視死生亦齊矣（壺子の死生を視ること亦齊し）。

死生も一體なるものであるとしたことでも了解出来るからである。さらに、

以生而若死、終則反本、未生之時、而與化爲一體、死之與生一體也（以て生くれども死せるが若く、終れば則ち本に反る。未だ生ぜざる時は、而ち化と一體爲り。死と生とは一體なり）。

と。これは、死と生は一體であるという『淮南子』の「死生一如」の死生觀によるものである。

以上、主として、『莊子』『列子』『淮南子』に言及して、陶淵明の死生觀の思想的背景について考察を加えた。

次に、陶淵明の死生觀と佛教との關係について述べておきたい。佛教の盛んな六朝期にあって、佛教との關わりが殆んどなかったということは考えられないとして、佛教との關聯について指摘する試みがなされている。その中でも、吉岡義豊氏は、「歸去來の辭について」の中で、淨土五會念佛誦經勸行儀等を引用して、佛教の「歸去來の辭」へ與えた影響、慧遠の白蓮社が陶淵明の居宅に近いこと等をあげて、陶淵明の作品へ佛典が影響しているのではないかと指摘した後、

とにかく、あのような時代に、何物にもすがらうとせず獨立獨往した淵明は、佛老二子の門を叩いた人人とは、やや異つた安心と悟境を得ていた、といわなくてはなるまい。

と述べ、陶淵明の詩文に佛教の影響していることについて推論している。しかし、氏が「獨立獨往した淵明、佛老二子の門の人人と異つた安心と悟境を得ていた」の指摘は、別の點で注目すべきであり、そこにこそ、陶淵明が死と對峙し、深く凝視してなお佛教に救済を求めなかった大きな理由がある。

それは、顏延之が「陶徵士誄」の中で、

有晉徵士、潯陽陶淵明、南嶽之幽居者也（有晉の徵士、潯陽の陶淵明は、南嶽の幽居者なり）。

と記し、正史である『晉書』『宋書』『南史』の各本が、隱逸傳の中に陶淵明を隱者として位置づけていること、さらに、陶淵明自身も「答龐參軍并序」の中で、「我實幽居士」と隱者を自認していることから明らかである。

また、石川忠久氏も「陶淵明の隱逸について」の中で、

陶淵明の特點は、隱士としての處世をすぐれた感覺で詩にうたい上げたところにあると見る。言い換えれば、『隱士にして詩人』であることを主張した人物の最初に位置するものであった。

と卓見を述べておられる。

また、陶淵明自らも、「自祭文」の中で、生前の名譽や死後の名譽など氣にする世の中の人々とは異なつた存在であることを明示して後、

嗟我獨邁 嗟 我獨り邁き

曾是異茲 曾ち是茲れに異なれり

寵非已榮 寵は己れが榮に非ず

涅豈吾緇

涅ずむとも豈に吾緇くせんや

と詠じた後、

掉兀窮廬

窮廬に掉兀として

酣飲賦詩

酣飲して詩を賦す

と自ら詠じている。

〈掉兀窮廬〉は、貧乏住いに孤高を守る隠者の存在を明示しており、

〈酣飲賦詩〉は、詩人である自己の存在を物語っている。臨終を迎え

た陶淵明は、自分の来し方を靜かにふり返って、自己の存在を總括した時、俗世間にその生活の場を置いたとしても、俗に涅ずまない孤高な隠者であり、詩人であった自己の存在を、ここに明確に位置付けていることに注目すべきである。

さらに、付け加えるならば、陶淵明の詩文を詳細に見て、少なくとも、佛教特有の未來世に救済を求め、詩句の見當らない點も指摘しておきたい。

多くの名士が、慧遠の白蓮社に出入し、名僧と交わっているにもかかわらず、陶淵明は、敢て「死」の問題を執拗とも言えるほど、度々提起し乍ら、佛教に救いを求めなかつたのは、隠者としての自己の存在と世の人々と妥協せぬ孤高な自負心があつたからであろう。

そうした當時の社會における陶淵明の存在を見据えた鐘嶽の『詩品』の

宋徵士陶潛……古今隱逸詩人之宗也。

の斷は、陶淵明の眞實を知るものといふべきであろう。

## 結 語

死への不安や恐れ、その苦惱や辛苦から斷腸の思いを抱く、それか

陶淵明の死生觀について

ら逃れる爲に時に酒に溺れ、時に仙界を求め、不老長生を切望する。

しかし、それは求めるべくもなく、叶うべくもない。そうであつてみれば、自らに言い聞かせて死を乗り越えて行かねばならない。そこに、諦觀があり達觀があつた。そうした死生觀の源流には、『春秋左氏傳』の虞殯、『詩經』や漢代の薤露歌、蒿里曲、古詩十九首、魏の繆襲、晉の陸機の挽歌等がある。そして、思想的背景には『莊子』『列子』『淮南子』などの「あるが儘に死につく」という老莊思想に基づく死生觀がある。

しかし、残念なことに、陶淵明は死を超越することが出来ず、恰も歸田した時のように、度々自らに問いかけて確かめるのである。これでもいいのかと。しかし、納得のいく解答の得られないまま死につくのである。

こうした死へのプロセスの中の陶淵明の死への不安、恐れ、諦觀、達觀などは、一見矛盾しているかのようなのである。しかし、人間誰しも死に直面した時の複雑な心の動搖は隠せないのが眞實であろう。吉川幸次郎氏もその著『陶淵明傳』の中で、

哲學による達觀、それも淵明にとつて眞實であつた。それとともに、哲學などによつて拂いのけなれない不安、それも淵明にとつて眞實であつた。……矛盾を矛盾のままに表白しているのが、淵明の文學なのではないか。

と述べておられる。

幼少時に、父と死別して以來、死を身近かなものとしてとらえるようになつたのであろう。陶淵明の作品を仔細に見ていくと、常に腦裏に死が意識されていたように思える。「篇々に死あり」とさえ言い得よう。歸田以後においては、この傾向は増大して行つたようである。

陶淵明は死と對峙し、死を擬視し、死を眞剣に考え續けた隱者であり詩人であった。

〔表〕陶淵明の作品と思想的背景

No.	陶淵明の作品	思想的背景	死生觀
1	人生若寄。顧頡有時 〔榮木〕	生寄也 死歸也 〔淮南子〕精神訓	〔莊子〕 〔二死一生〕 〔死生一體〕
2	形骸久已化。心在復何言 〔連雨獨飲〕	斯形化其心與之然 〔莊子〕齊物	〔二死一生〕 〔死生一體〕
3	感吾生之行休。已矣乎 〔歸去來兮辭并序〕	其生若浮 其死若休 〔莊子〕刻意	〔死生一體〕
4	人生似幻化。終當歸空無 〔歸園田居〕其四	因形移易者謂之化。謂之幻。 〔列子〕周穆王 知幻化之不異生死也 〔列子〕周穆王	〔列子〕 〔二往一反〕
5	萬化相尋異。人生豈不勞 〔已酉歲九月九日〕	若人之形者萬化而未始有極也 〔莊子〕大宗師	〔列子〕
6	縱浪大化中。不喜亦不懼 〔形影神并序〕神釋	人自生至終 大化有四 〔列子〕天瑞	〔列子〕
7	常恐大化盡。氣力不及衰 〔還舊居〕		
8	自恐大分將有限也 〔與子儼等疏〕		
9	聊乘化以歸盡 樂夫天命復奚疑 〔歸去來兮辭并序〕	與時俱化而無肯專爲 〔莊子〕大宗師	〔淮南子〕 〔死生一如〕
10	豈然乘化去。終天不復形 〔悲從弟仲德〕	其生也天行 其死也物化 〔淮南子〕精神訓	〔淮南子〕
11	人理固有終。居常待其盡	生者理之必終者也	

〔列子〕天瑞

- 12 遷化或夷險 肆志無窻隆  
〔五月旦作和臧主簿〕
- 13 窮通靡攸慮 顧頡由化遷  
〔歲暮和張常侍〕
- 14 客養千金軀 臨化消其實  
〔飲酒〕其十一
- 15 余今斯化 可以無限  
陶子將辭逆旅之館
- 16 陶子將辭逆旅之館
- 17 永歸于本宅  
〔自祭文〕

處吾之家如逆旅之舍  
〔列子〕仲尼  
鬼歸也 歸其眞宅  
〔列子〕天瑞

注(1) 辛丑歲は、隆安五年、陶淵明三十七歳の年である。七月桓女の幕下に  
あつた陶淵明は、故郷で休暇を終えて任地の江陵に歸つたのである。此  
の年の冬、實母が亡くなる。

(2) 「歸去來兮辭序」に、「尋程氏妹喪于武昌。情在駿奔、自免去職」とあ  
る。また、「祭程氏妹文」に、「維晉義熙三年五月甲辰、程氏妹服制再  
周」とあるところから、義熙元年十一月に亡くなったといえる。

(3) 「魯迅全集」竹內好譯 筑摩書房刊。

(4) 彭祖は、姓は饒、名は鏗、顓頊の女孫で彭城に封ぜられ、殷の頃迄  
七、八百年生きたとする。「莊子」逍遙遊篇に、「彭祖乃今以久特聞」と  
ある。

(5) 「雜詩」其一に、「人生無根蒂、飄如陌上塵」とある。また、古詩十九  
首其四にも、「人生寄一世、奄忽若飈塵」とある。

(6) 志村良治氏は、『中國詩論集』(志村良治博士著作集Ⅰ)―汲古書院刊  
―の、「陶淵明「死去何所道、託體同山阿」考」で、陶淵明の「空無」

が當時譯出されていた佛典から直接學んだかどうかははっきりしないとしながら、『廣弘明集』卷三十に、「鄭矣千載事消、液歸空無」や「一切萬有終歸於無、謂之爲空」等の使用例を擧げて、陶淵明の「歸空無」に近いのではないかと述べている。

- (7) 『荆楚歲時記』に、「九月九日四民竝簪野飲宴」とある。さらに、杜公瞻の註に、「九月九日宴會。未知起於何代。然自漢至宋未改、今北人亦重此節。佩茱萸食餌、飲菊花酒云令人長壽。近代皆宴設於臺榭」とある。『續齊諧記』にも、山に登り菊花の酒を飲み、厄拂いをしたことが記されている。

- (8) 『西京雜記』にも、「九月九日佩茱萸食蓬餌飲菊花酒、令人長壽。菊花舒時并採萸葉、雜黍米釀之。至來年九月九日、始熟就飲焉。故謂之菊花酒」とあるように、菊花酒を飲んで邪氣を拂い不老長生を願った。

- (9) 『莊子』齊物論篇に、「近死之心、莫使復陽也」とある。
- (10) 『遊斜川并序』にも、「開歲修五日、吾生行歸休、念之動中懷」とある。「影答形」にも、「身沒名亦盡、念之五情熱」とある。

- (11) 松喬は、赤松子と王子喬のことで、ともに仙人。『列仙傳』に、赤松子は、「神農時雨師也。服水玉以教神農。能入火自燒。往往至崑崙山上、常止西王母石室中、隨風雨上下。」とある。また、王子喬については、「周靈王太子晉也。好吹笙作鳳凰鳴。遊伊洛之間。道士浮邱公、接以上嵩高山」とある。

- (12) 『莊子』達生篇に、「世之人以爲、養生足以存生」とあるによる。
- (13) 『莊子』庚桑楚篇に、「衛生之經、能抱一乎」とあるによる。

- (14) 「五月且作和戴主簿」詩に、「遷化或夷險、肆志無愆隆、即事如已高、何必升華嵩」とある。

- (15) こうした死のとりえ方は、『列子』天瑞篇に、「生者理之必終者也。…而欲恒其生盡其終惑於數也。(生ある者は理として必ず終る者なり。…而るに其の生を恒にし、その終を盡らんと欲するは數に惑へる者なり)」

### 陶淵明の死生觀について

とあるによるであらう。

- (16) 『北堂書抄』卷九十二に、「挽歌者執紼相和之聲、爲歌以寄哀」とあるところから、挽歌は死者の柩の綱をとってひく時の歌である。

- (17) 『春秋左氏傳』哀公十一年に、「將戰、公孫夏命其徒歌虞殯、陳子行命其徒具含玉……」とある。虞殯は、葬に際して殯宮に虞殯(魂を安んじ祭る)し、葬送時にうたう歌である。齊の公孫夏が部下に命じて、葬送の歌をうたわせ死を賭して戦わせようとしたのである。

- (18) 『文心雕龍』哀弔篇に、「黃鳥賦哀抑亦詩人之哀辭乎」とある。
- (19) 『中國文學報』第十二冊(京都大學刊)

- (20) 『挽歌』其二にも、「殺案盈我前、親舊哭我傍」とあり、其三にも、「嚴霜九月中、送我出遠郊」とあることから、自挽歌であるといえる。

- (21) 『文體明辨』に、「祭文者古祝文之變也」とある。
- (22) 伊藤漱平編『中國の古典文學』(東京大學出版會刊)の「歸去來の辭―隱者のうた―」にある。

- (23) 『中國文學報』第十八冊(京都大學刊)

- (24) 『雜詩』其七にも、「家爲逆旅舍、我如當去客、去去欲何之、南山有舊宅」とある。

- (25) 古詩十九首其三に、「青青陵上柏、磊磊澗中石、人生天地間、忽如遠行客」とある。

- (26) 『莊子』至樂篇に、「生者假借也」とある。また、古詩十九首其十三に、「人生忽如寄、壽無金石固」とある。

- (27) 『莊子』天道篇にも、同字句がある。

- (28) 註(6)の志村良治氏や宮澤正順氏の「陶淵明の「子供を詠める詩」をめぐる」(中哲文學會報第二號―東大中哲文學會刊)等がある。

- (29) 『中國文學報』第六冊(京都大學刊)
- (30) 『日本中國學會報』第十七集
- (31) 『陶淵明傳』(新潮文庫)三十五頁